

1 2 泌尿器科フェロー研修要綱

指導責任者 吉野 薫

目的と特徴：先天性尿路・性器疾患、後天的小児泌尿器科疾患の診断と治療の実際を研修し、小児泌尿器科疾患に対する治療法を具体的に修得する。

1年目の基本的目標

- 1 外来診察に陪診し、診察の技術を研修する。自ら外来検査を介助または実施し、検査結果を判読し診察結果と合わせて診断し、治療方針を決定する知識を習得する。
- 2 手術に際し、第一助手、または第二助手として介助し、解剖所見を理解し、手術手技を総合的に研修する。小手術を自ら行う。
- 3 入院患者の担当医として術前、術後の管理を実際に行うとともに、日常使用する薬剤の薬効、副作用を理解する。また診療録の書き方を実践する。
- 4 学会、研究会に出席し、新しい知識を習得する。
- 5 抄読会に出席し、論文の紹介を分担する。

2年目の基本的目標

- 1 外来診察に陪診するとともに、自ら診察し、診断、治療方針をたてる。
- 2 全身麻酔下の内視鏡検査を行う。小、中手術の術者として手術を行い、大手術では第一助手として介助する。
- 3 入院患者の担当医としてすべての管理を行い、入院診療計画書や手術同意書をみずから説明し、患者家族の理解、同意を得る。
- 4 臨床研究を行い、学会、研究会に発表し、論文を作成する。
- 5 抄読会に出席し、論文の紹介を分担するとともに質疑応答に参加する。

3年目以降の基本的目標

- 1 自分の外来枠をもち、外来患者の診察、検査、治療方針をたてる。
- 2 小手術の第一助手として後進の指導にあたり、中、大手術の術者として手術を行う。
- 3 入院患者の管理において後進の指導にあたる。
- 4 国内外の学会、研究会に積極的に参加、発表し、論文を作成する。
- 5 抄読会の準備を行い、抄読会の進行を行う。

習得すべき実績：すべて指導医の指導のもとに研修を行うが、担当医として指示出しや処方研修医が主体となっていく。教育的回診に際し、担当する患者に関しての情報を指導医に報告する。手術を行う場合は研修医のみでは実施しない。また1年毎に指導医による実績の評価が行われる。

1年目に習得すべき項目

- 1 外来診察の陪診により患者の病態を推察し、診断に必要な検査を選択できる。
- 2 小児泌尿器科検査（超音波検査、排尿時膀胱尿道造影、ウロダイナミックス、利尿剤負荷RIなど）を自ら実施できる。
- 3 検査の結果から治療方針を導き出すことができる。
- 4 小児泌尿器科疾患の内科的治療に必要な各種薬剤の効果や副作用についての知識をもち、治療計画をたてることができる。
- 5 外科的治療法の選択ができ治療計画をたてることができる。
- 6 入院治療のタイミングを判断でき、入院に必要な指示をだすことができる。
- 7 入院、手術に必要な病棟、麻酔科との交渉ができ、必要な情報交換のもと手術の準備ができる。
- 8 術前後の管理ができる。
- 9 診療録に必要な事項がもれなく記載できる。
- 10 小児泌尿器科小手術（精巣固定、陰嚢水腫手術など）において指導のもとに執刀できる。

2年目に習得すべき項目

- 1 手術同意書、入院診療計画書、輸血同意書の作成ができ、患者家族への説明のもとに同意が得られる。
- 2 全身麻酔下での内視鏡検査が自ら行える。
- 3 小児泌尿器科手術のすべてに参加し、その技術を理解できる。
- 4 すべての小児泌尿器科小手術（精巣固定、陰嚢水腫手術、内視鏡手術など）において自ら執刀医として実施できる。
- 5 尿道下裂をのぞくすべての手術（膀胱尿逆流症、水腎症など）で執刀できる技術をもつ。尿道下裂は部分的に執刀するが、本人の技術しだいで全行程を執刀できうる。
- 6 情報の過不足なく適切な手術記載を記載することができる。
- 7 患者家族に手術の内容を説明できる。
- 8 術後の経過から退院予定をたてることができる。
- 9 年2回以上国内学会に出席し、1回以上発表を行う。

3年目以降に習得すべき項目

- 1 自分の外来診察日を持ち、実際に診察、診断を行い、治療方針をたてることができる。
- 2 手術予定を設定でき、みずから手術を行うことができる。
- 3 小手術においては2年目の研修医の指導を行うことができる。
- 4 尿道下裂の手術において自ら執刀できる。
- 5 1年目、2年目の研修医に対して病棟業務の指導ができる。
- 6 年2回以上の国内外の学会発表を行い、1部以上の論文を執筆する。